

熊野飛鳥むすびの里  
代表 荒 谷 卓

## 生成思想と武士道

### 1 世界が求める武士道と神道 ―国際的武道指導からの発見―

《世界の人々の言葉から》

市場中心のグローバル資本主義によって、我々は本来人類が歩むべき正しい路線から著しく逸脱しつつあり、人類はおろか地球環境全体までも荒廃へと突き落とされかねない危機に瀕している。我々は、武道を通じて、この現状を再考し人間の本来の立ち位置に戻ることを提案したい。

武道は日本の伝統文化に根ざしたもので、今日の世界的人類遺産のなかでも極めて価値あるもののひとつである。そこに共通的に存在するはずの我々自身（世界の人々）の伝統とエートスを見い出すことによって、我々は、世界の運命を正しく豊かな道へと導き民族間の理解と親和を強化することができる。

**武士道精神に内在する精神規範は世界人類を正しく豊かなものへと導く**

欧州の人々は、合気道の様な他人を傷つけない武道、敵に戦いを放棄させるよう促す鹿島神流の技や「活人剣」という考え方が存在する事に驚きます。敵を傷つけ殺す為にある欧州の武術ではとても珍しい事です。

際立った大任であろうが、日常生活の俗務であろうが、それぞれの課題に全力で、専心に、内面的正しさや真っ直ぐな精神で取り組むことが武道であるということを分かるようになりました。

武道は、自分の能力を共同体の善に貢献し、それによって共同体に恩返しをする為に使う人になることです。

日本の社会生活は、社会に対する貢献としての自己責任を中心に営まれ、

清潔にすることが社会の主要な価値の一つになっている。それは各人が最善の意図を明らかにし、そのことで**皆に貢献する**という前提に根ざしている。この価値観の故に、協力的な共同体生活の基盤が築かれ得るのである。

武道を学ぶことによって、**生きている限り誠実であれ**ということを学んだ。もし、自分のためにだけ生きるとしたら、死後、何も残るものはない。この人生を意味のあるものにするには、**他のために生きること**である。「この生き方がなんの役に立つのか」という問いに対して私の答えは、目に見えない精神レベルで私達は一つであるからだということだ。人を助けることによって、その一つの存在を癒し、力を与えることに関わって行くということである。死する事は難しいことではない。それよりも、正しく生きることの方が困難なことである。誠実であれということとは、たとえそれが敵対するものに対してもである。誠実であるということとは日本の美德であると思う。**他者のための自己犠牲**を日本の武人は体顕した。これが真の武道の目的であり意味である。

自らの正しい判断のもと誠実に道徳的に行動する。日々、他人の利益のために自己を犠牲にする高貴な精神。それが武士道です。

**武士道が教えるものは主体的精神規範の確立、利他、帰属社会への貢献**

恩恵を与えてくれた**祖先に対する「感謝のこころ」**は伝統的社会では受け継がれていても、個人主義的な現代社会では失われています。日本の社会には「**感謝のこころ**」がしっかりと認識され、存在している。「**感謝のこころ**」は、日本だけでなく世界の国々の多くの文化で共感できる価値観だと思います。この「**感謝のこころ**」を持つことによって人々が同じ土台に立てるのです。

日本の文化には、**他人に対する思いやりとコミュニティーの統合力**が存在します。日本人は気がつかれないかもしれませんが、**他人への配慮や思いやりの文化**は、日本社会の隅々まで浸透している神道のお陰だと私は確信しています。**祖先を崇拝し、自然や人々との親交を大切にする**考えは人間が存在する本来の意味であると思います。

神道と日本人の生活において、「自然」というのは一年の流れと人々が

自然に重なり合い調和している状態を意味し、それによって人々は**自然との一体感**を感じたり、人生の目的を見つめることが出来るのでしょうか。日本人は、**季節から大きな恩恵**を得ていると感じており、季節のサイクルに則った日本人の生活習慣が生まれ、**自然にしっかりと根付いて生きる精神**が存在しているように思います。

**神、自然、祖先、君、親、社会、他者等あらゆるものに対し報恩感謝**

神道においては、宇宙と神の創造的精神の分離はない。宇宙は神の創造的精神そのものが物質や生命として広がったものであり、精神、物質、生命という3つの実体があるのではないのである。物質と生命は、神の精神が自己を違う姿に再創造したものであり、本質はつねに神の精神なのだ。神道は、最も広義の生命表現であるという点で、日本人の枠を越えている。それは一国の歴史という形で生命自体の知恵を表すが、その意味の適用範囲は世界に及ぶものである

禊ぎの後、生きる活力と人生の目的について新たな感情が湧き起こったように思った。禊ぎの持つ意味は、いかにして外部の力に頼るかではなく、自らの力で変身できるように頑張るということである。

教義を押し付けられたり、神学的な義務づけが存在しない神道は今まで出合ったことのない宗教観です。神道では、厳格な規制や教義がないために、幅広い多様性と自由が生まれるのです。

日本人の「**調和**」の精神は、お互いがよい関係を築けるよう配慮し合うことで保たれる感銘深い文化です。

あるものの衰勢の後、違うものの向上が起こるという循環の理は分かりやすく、この理を自分で内面化し、**死も新しいものの始め**として見れば、死の恐怖もかなり減ります。

武道とは、自分の内へと繋がる道であるといえる。武道は、私の見ている世界を「**一つ**」の**世界**へと導く。全てはひとしく「**ひとつ**」なるものであり、「**ひとつ**」になることを目指すものである。

**調和、循環、一体の宇宙観、自然観、歴史観、世界観、社会観**

## 2 武士道の起源—今泉定助の神典解釈「生成思想」—

(1) なぜ、日本武道に、創造的主体性や和の精神が内在するのか。

○世界のマーシャルアーツ全てが殺傷を唯一の目的としているのに、なぜ我が国の武道では「殺人剣」を戒め、「活人剣」を目指す武道が生まれたか。それは、日本には、あらゆるものを受容し同化する天皇が存在したからである。三島の言葉を借りれば、『文化概念としての天皇は、文化の全体性の2要件である、時間的連続性が祭祀につながり、空間的連続性はときには政治的無秩序をさえ容認するに至る』。

○しろしめす。きこしめす。みそなわす。これが日本の神々の特徴であり、天皇陛下は、それと同じ御存在。この完全なる受容に対し、感謝の心をもち、情動的・文化的の統一すなわち君民一体を可能としているのである。

○鹿島神流国井善弥は剣の道を、大御心の発揚であり「包容同化」の大義を示す天の側業と呼んだ。敵対者に対しても相手方の非を是正し自他共に生存の実を現すところに平和の母体としての「武(産む)」が存在する。

○さらに辿れば、日本神話の中にある『生成思想』にたどり着く。

(2) 武の伝統

○武士道精神とは、武士という集団が形成される遥か以前から継承される猛々しい精神である。

「大丈夫(ますらお)」という言葉は、【カムヤマトイワレビノスメラ命・神武天皇、紀第三卷】カムヤマトイワレビノスメラ命(神武天皇)の長兄イツセノ命が戦に死すとき自らを『大丈夫』と称したのが初。

神武東征に同行した大伴の祖ミチオミノ命は、皇孫の『大丈夫』の精神をまねび継承す。大伴家持の歌に「海行かば水漬(みづ)く屍(かばね)山行かば草生(む)す屍。大王の辺(へ)にこそ死なめかへり見はせじと異立(ことだ)て。大夫(ますらお)の清きその名を古よ今の現(をつつ)に流さへる祖(おや)の子どもそ大伴と佐伯の氏は人の祖(おや)の立つる異立て人の子は祖の名絶たず大君にまつろふものと言ひ継げる言の官(つかさ)そ梓弓手に取り持ちて剣大刀腰に取り佩き朝守り夕の守りに大王の御門の守り我をおきてまた人はあらじ」とある。

「さむらい」という言葉は、【防衛奉護の神勅・紀一書】『天照大神、天兒屋命・太玉命に勅すらく、惟(ねが)はくは、爾(いまし)二神、亦た同じく殿(みあらか)の内に侍(さむら)ひて、善く防ぎ護ることを爲せ』とある。天皇をお守りすることが「侍(さむらい)」起源。

「もののふ」という言葉は、饒速日命の子孫者物部氏に由来。物部氏は、第21代雄略天皇から30代敏達天皇の御世は天皇の忠臣として軍事、警察、司法を取り仕切る武の長の地位にあったが、渡来系の豪族で崇仏派の蘇我氏との政争に敗れ没落。

後に武家が形成されて後も「武家の棟梁」の資格は清和源氏と桓武平氏のように、天皇の子孫であり、忠臣足る者のみが成ることができた。

#### ア 神代の「武」

- 天地初発之時『産霊（むすひ）』
- 修理固成『天沼矛で国生み神生み』
- 天照大神の御武勇 和魂と荒魂
- 国譲り『しろしめす、不殺の武徳』

#### イ 天皇の「武」

- |       |                        |
|-------|------------------------|
| ○神武天皇 | 橿原建都に際し八紘為宇を御示しになる     |
| ○景行天皇 | 大和武尊をもちて国を平けむ          |
| ○仁徳天皇 | 盾人宿禰をもって武威を示す          |
| ○龜山天皇 | 身を以て国難に代わる気概、蒙古撃退後も訓戒す |
| ○孝明天皇 | 国難に際し御自ら統帥親征せんとす       |
| ○明治天皇 | 大和魂を御自ら御示しになる          |

#### ウ 臣民の「武」

- |           |                           |
|-----------|---------------------------|
| ○天兒屋命・太玉命 | 殿内防護の神勅（侍ひて善く防ぎ護ることを為せ）   |
| ○大伴氏・佐伯氏  | ますらお(大丈夫)の家訓(道臣命、大久米主の子孫) |
| ○物部氏      | もののふ(武士)の大本（邇藝速日命の子孫）     |
| ○弟橘比売命    | 身を挺し日本武尊の心に報いる            |
| ○北条時宗     | 君臣心を一にして、固き決断示し兵を振るわせた    |
| ○北畠、楠、菊池等 | 忠君の極み                     |
| ○西郷、勝、山岡等 | 皇国の武士道                    |
| ○靖国の御霊    |                           |

## (2) 今泉定助の神典解釈「生成思想」

### 【鹿島神流】国井善弥

顕宗天皇(在位 485～487)の御世、天兒屋根命を先祖とする鹿島神宮神官國摩真人が、武甕槌命の祓太刀「鹿島の太刀」を「神妙劍」として顕現。「我が国は神武(産)の国なり。武は、天下しろしめし給う大御心の発顕にして、包容同化の大義を示す天意の側業なり。鹿島神流は、倒敵破邪の愉悦を好むものに非ず、天下御治召し給う大御心に副い奉るの士を培うに在り。鹿島神流は、初において身体を整え、中において心気人倫を養い、極めては宇宙創元の理を悟るに至るべし。これ神流の奥義にしてこれ神なる日本本来の大道なり」

「大義を重んじ、包容同化の精神を培養し、たとえ敵対者に対しても、日ごろ練磨した術技によって己を全うし、相手方の非を是正するところに真の武術の意義が存在する。術技を通じて、包容同化の精神如実に具現し得たとき、自他共に生存の実が生ずるので、神武(真武)の下に平和があり、平和の母体として武道が存在す。心身を鍛錬し、万難不屈の大丈夫を養い、祖国日本のため全身全霊を尽くすのみ。」

近代合理主義を唱えるデカルトは、人は「我在り」と他の一切の外にある存在に対し独立して存在するとしてとらえ、その存在は肉体の死によって完全に終わることになる。つまり、人間にとっての実在世界とは、有限の時間に、(物質としての)個人が認識できる自己とその他の存在だけである(ユダヤ、キリスト、イスラムの絶対創造主たる神は別の世界に存在し、この世の存在としてのアダムを創造した)。今泉定助は、このような「在る」を基底とした思想を「存在思想」と呼んだ。

一方、日本の神話では、天地初発之時、高天原に天之御中主神が「成りませる」。つまり神は、宇宙(神、宇宙、時の万物万象を一体としての宇宙)そのものとして成ったとされる。最初の神が天(宇宙)の中心と成り、天地の神々が次々に生成し森羅万象を生み、その「生成」は連綿と無窮に続くと考える。したがって、その生成によって生まれた人は最初の神の性質(霊:エネルギー)を継承し「生まれ成り」、宇宙万有と一体となって、宇宙の生成活動を担うべき霊体としてとらえる。物質としての人の死は、いわば宇宙(自然)の新陳代謝で、その霊的性質は、神とともに永遠であり、新しく生まれたものに引き継がれることになる。今泉定助は、すべての存在は「生まれ、成る」から在るのであって「成る」立場に立って体験・体得・体顕する行的境地から始めて真理を

知りえるとし、これを「生成思想」と呼んだ。

日本神話の世界観は、宇宙創元以来無窮に続く時間的・空間的・霊的全体であり、人が存在として捉えることができる物質ばかりではなく、未確認の物質や、存在としては認識できない霊、魂、生命のような非物質、過去から未来に続く無限の時、そして神をも含む万有万象の総てが含まれるということになる。興味深いことに、現代の最先端の素粒子物理学は、エネルギーと物質の交換原理を証明し、宇宙の創元はエネルギーが物質を誕生させたとの理論が証明されている。宇宙は非物質たるエネルギーと物質と時間から成る。科学はようやく神道の宇宙観に近づいてきた。このエネルギーこそ、私たちが霊、魂、気等と呼んでいるものなのだ。

日本の「神」の概念では、宇宙を一つの生命成長体としてとらえるので、総ての人は、家や社会、地球、宇宙、時、神の一員として何らかの役割を担うのであるから、自己の成長は全体の成長であり、全体の成長は自己の成長ととらえる。人の体で例えるならば、数百兆個とも言われる体細胞一つ一つの生成活動が一人の人間の成長として現れているのと同じだ。

人間は、社会に生まれ、相互に助け合い、自然と調和し、家を、地域を、国家を、世界を、宇宙を常に成長発展させるよう活動することが自然の状態と考える。したがって、個々が独立し対立するという発想はありえないし、そのような自己本位な考えは禍憑く（まがつく）とか、穢れるといって忌み嫌う。人体で言えば、全体との調和を欠いた自己成長によって本体を死に迫いやる癌細胞のようなものだ。

「生成思想」では、人は、宇宙の一部であり、宇宙創元以来の万有万象と共に同じ時の中に「生まれ成る」神の子孫である。自ら自分の存在意義を定義する必要はなく、人は皆、生まれながらにして歴史的・社会的役割を持って生きているのだから、平等という概念も不必要である。

この原点に立つならば、人類のあらゆる努力は、人と人、人と自然、今と過去、今と未来、人と神、総てが一体となって成長を続ける共生活動へと指向されることになる。個人から国家等のそれぞれのレベルで、対立と分断、略奪と独占、差別と偏見のような社会の一体性に反すること、他者の成長と生成活動を妨げる行為は、本来の共生活動へと正さなくてはならない。公益に資する利他的行為を社会倫理とし、万民の福祉を充実させ、人類と自然が一体的に共生

することを目的とする生成思想をもって、万民万象にとってよりよい世界を構築することが人間の使命であると考えてるのである。

このような思想が定着し、社会秩序として慣習化してくれば、自己犠牲は必ず報われる相互扶養の仕組みを誰もが認識できるようになり、自己を超越した社会に対する貢献要求は、常識化してくるのである。

万有総て天之御中主神の分霊分魂たる神の子であって、始から罪の子というようなことはあるべからざることである。私どもは生まれながらの「直霊（なおひ）」を現実に発揮することを天職とするとしている。

神から生まれた人間は、「直霊」を内在すると言う考えは、人間は神から「理性」を与えられたということと、同じ発想である。しかし、「理性」の認識は、スコラ学の影響により理論的技法によって発展した結果、人間の論理的推論力で証明しうる範疇ものへと狭隘化したように思われる。さらに、近代西欧思想では、「理性」の神性探求から離れ、自己保全の論理と関連付けたところから、神性発顕（理想的な行為をする自己）と私利的欲求（欲求に基づく行為をする自己）との区別が曖昧化した。その結果、現代では、人間に内在する「理性」探求のための十分なる内省もせず、私利的欲求を「理性」として正当化する傾向が極端に強まっている。

このような状態は、神道的視点から見れば、「直霊」の統一を欠き分裂した「禍津日（まがつひ）」の状態であり、人間がその天職を忘れた状態であるとする。かかる状態は、飽くことを知らぬ人間の欲求が、本来の自性発揮に不要なものまで受け入れた結果穢れに負けて「禍津日」に化すと考えるのである。

このような状態に陥らないように「禊祓」をして穢れを祓い清浄を保ち、内在する「直霊」を今現在に顕わす自発的努力が必要となる。「禊祓」の行は、今日の社会においては極めて重要な意味を持つことになる。

人間が「直霊」を内在しているという普遍的状态だけでは、神の子としての自性発揮には至らず、ともすれば自らの欲求に負けて禍津日に化し、あるいは氣力が枯れて「穢れ」ることになる。そうならないように「禊祓」の行事をして、神と一体と成るように努めることが重要とされる。

今泉定助は、「直霊」について『宇宙は渾然たる統一体をなし、太陽系は一つの統一体系を造り、地球は一つの統一形態をなし、地球上の万有万象もまた常



に統一体として生成し、発展するものである。この靈魂の絶対統一性が、即ち「直靈」と名づけられるのである。』としている。この点は極めて重要なところである。自然即ち地球上の万有万象と一体となり、宇宙・時・神と一体となることで「直靈」が働くというのだから、人間は、社会そして大自然の一員として生まれ成り、全体とともに成長していくという発想こそが、万民の幸福と世界の平和を構築する根本原理となる。

「存在思想」においては、学問において研究するものと研究されるものとが対立し、客観に「在る」物なり現象なりの総てを、それから離れた別の「在る」主観的立場から研究するのである。研究されるものは総て客観化されて対象となり、研究する人間は「我あり」という対象の外に立つわけである。我自身の研究もまた、我自身を客観に「在る」ものとして対象化し、別の我たる主観的「在る」の立場から眺めて我を知ったことにするのが存在思想から発展した科学というものである。他方、「生成思想」においては、「成る」立場に入ってはじめて体得しうる境地を言い、「成る」ことによつてのみ真の我があり、われを知ることのできるのである。宇宙万有と同根一体の生命を呼吸し、それを体験し、それを体得し、体顕することで真理に至るというのだ。

過去のものとは現在のものとは別に二つあるのではなく、同じものの中からの発展である。「存在思想」の立場、つまり外から見ると二つであるが、内から見ると一つである。内から「成る」の一体的立場に立って、過去がそのまま現在となり未来となることを知り、子供がそのまま大人となることを知り、進んで万有の対立を去って之と一体に成り万有を真に知るの学問が開かれるのは「成る」の立場からである。

古事記冒頭の一説『天地初発之時』では、『時は、高天原と共に成り、天之御中主神と共に成ったのである。神と時と宇宙とは一緒である。神、宇宙、時を離れた別々のものと見て、例えば、神や宇宙を時の支配の下に置き、神はいつからあるかとか、宇宙は何時できたかというように考えては分からなくなり、また、宇宙万有を本地にして考えると無神論、唯物論に墮することになり、更に神が宇宙も時も造ったものとする、神を超在させて後に説くような存在思想に陥る。

自らが、宇宙の当事者であり、時の当事者であり、神の当事者として、宇宙の中に生まれ、宇宙の中に行い、宇宙の中に死ぬ。かように、宇宙の中で生きて、行い、成し遂げる自己を体現する思想が日本の神道である。

時は、過去と今と未来を一体となす。今の空間的つながりを時系列として一体化する。つまり、宇宙創元以来の物質的・霊的活動の総てが時として一体化し、渾然たる統一体としての宇宙をなしているのだ。そう考えれば、人間一人ひとりが生まれ成り、生命を授かった心身の働きは、宇宙創元以来続く全体の生成活動の一翼を担う大いなる意義を有することが分かる。

神道には、連綿と続く「時」の考えがあつて、それを「中今（なかいま）」とよぶ。宇宙の創元から未来へと無窮に続く時は常に「今」に集約顕現されるという考えだ。天の下（宇宙）をひとつの家と為さんとする「八紘為宇」の意思と行動は、宇宙創元以来、そして神武建国以来、時と共に休むことなく連綿と「今」に顕現されるからこそ、天壤無窮に栄えるのである。

自らが、時の内に主体となって行動し成長発展するという積極的生き方である。「今」を大事にするということは、過去の出来事に意義を持たせ、将来の基盤となる「今」に精一杯の努力を惜しまないということだろう。「今」を無駄にするということは、個人のみならず人類のそして地球の歴史の営みと努力を無駄にし、子々孫々の未来を破壊することにつながる。「今」この時に、人間一人ひとりが「世のため人のため」と力を尽くすことが、宇宙に生まれてきた重要な意義ではなかろうか。

物質としての肉体の共有は適わないが、精神・心・霊の共有は可能であり、人類と自然の成長発展に貢献した人の精神は同じ時に生きる人々のみならず、時を違えて生きる人々の心までも感化し、共鳴させ一体化させるのである。そうすれば、一人では到底できるはずもない大事業が、空間的広がりだけではなく時間的継承によって達成されるのである。

私たちが、『伝統精神の継承』と呼ぶところのものは、一個人では達成できない大きな目標を、世代を超えた意志の継承という長期的な努力の積み重ねにより成し遂げようとするものである。それは、宇宙創元の理を悟り、先達の思い描いた理想や理念に賛同し、時代を越えてその遺志を引き継いでいくことで、時を貫く意志の柱を打ち立てることになる。それによって、一世代では不可能な理想社会の実現を歴史的集団の事業として維持・発展させることを、日本人は価値あるものと見なしてきた。

この視点からは、個々の人間がその一生涯に自分のためにどれだけのことを

成し遂げたのか、が問題ではなく、社会に生きる人間として、同じ時代に生きる人々との絆や融和だけではなく、過去や将来、即ち祖先や子孫との心と意志のつながりをも大事にし、時と空間をまたぐ無窮の大事業にどのように貢献したかという歴史的役割こそ価値があるものとみなすことになる。歴史的役割とは、一人の行為が歴史を通じ多くの人々に貢献するという不朽の利他的使命を為しえたということである。

このような、積極的生き方が「中今」であり、それを促す思想を「八紘為宇」と呼ぶ。『天の下をおおいて家と為む』という神武建国の詔勅にある日本建国の思想である。国が、そして世界が、大自然が苦しみも楽しみも分かち合い、共に助け合い、共に成長を願う家族のように暮らす世を造り為さんとする、主体的かつ継続的、生成活動を目的とする人類思想である。

### 3 武士道の現代的意義ー存在思想から生成思想へー

#### (1) 武の目的ー何のための「武」か

- 宇宙は一体として成長する生命共同体。
  - 共生共存共栄の思想 →和の文化、絆、共助、在所共同体（里、郷、村）
  - 利他は徳 →世の為人の為、人に迷惑をかけない、思やり、空気を読む
- 神社は集団の祈り→横の繋り
  - 個人の成長と社会の成長は一体（情けは人の為ならず）
- 祭りは全員参加の共同事業
  - 自立するために協力、社会は共同運営、全ての人に役がある
- 氏神様は歴史的一体性の柱 →縦の繋り「祖先と共に生きる」
- 中今思想：過去は今に集約し、未来は今から創造する
  - 今に生きることの歴史的責任を果す
  - 一人ひとりが社会と歴史への貢献
- 自然（神）と共に生きる。「神ながらの道」
  - 自然を祀る（魂の繋がりを持つ）。
  - 自然の一部としての在所共同体。土地に根ざす全てを豊かにする。
  - 農は自然との共同作業、労働＝生命活動に参画することの喜び
  - 収穫の祈りは誓い（祈年祭）、恵みには感謝（新嘗祭）
- 人間の生死は、地（地球）から頂いた「生（身体）」と、天（宇宙）から頂いた「命（霊）」を元に還すこと（循環還元）
  - 宇宙に生まれ、宇宙に生き、宇宙に逝く
  - よく生き死を恐れず（一所懸命、一生懸命、武士道）
- 自然も人間も神々の子孫。万物は神性を内在。
  - 自分も神であるという自覚、神に近づく鍛錬練磨、天と己に恥を知る
- 神、天皇、戸主は、しろしめし、きこしめし、みそなわす
  - 受容と祈りと恩にたいする報恩感謝（神人一如、君民一体、家族）

#### (2) 武の実践ー武の目的に沿って生きる

- 利己主義を → 利他主義に
- 権利の主張を → 報恩感謝に
- 合理主義を → 経験主義に
- 自由競争を → 共助共栄に
- グローバル・スタンダード（法と金が支配する世界）を
  - 世界の人々が、それぞれの地域で、共助努力により生きていける 共同体を形成し、相互にその伝統、信仰、文化活動を尊重し侵害せず、全ての共助共同体が一体となって共存共栄できるローカル・スタンダード（風土に応じた共同体から成る世界）に

西欧思想が世界を覆うようになった近代以降、我々人類は、人間の「存在」と「理性」を過信し、多くの過ちを犯してきた。

神、時、自然と一体の人間の自性（直霊）を、自我意識の狭隘なる空間に閉じ込め、人間を孤立した物質的「存在」として蔑んできた。

神、時、自然と共に生きる壮大なる人間の「自由」を奪い、理論と法の奴隷状態に貶めてきた。

神、時、自然から生成した公共の恵みを人間個人が所有できるとかん違いし、他者と社会と自然の本来あるべき成長発展を妨げてきた。

このような教訓をもとに、我々は、禍津日を禊祓い、本来の宇宙の一員として正しく生きるための社会を再構築しなくてはならない。今泉先生が『人間はその団体生活を離れて、個人主義に走り、自由主義に赴くことが邪悪の出発点である。団体生活の分裂解体が人生悪、社会悪の根源である。』と指摘しているように、氏神様を中心とした伝統的村落や家族的に結ばれた共助体としての「家」を解体したことが、現在の孤独老人、年金・介護問題、就職難問題、いじめ、格差など現代的な社会問題の根本起源であろう。したがって、我々は、あらためて共助体としての「家」を再構築することから始めなくてはならない。人間は、社会の中で教え育まれ、体験し体得し体顕することで「直霊」の自性を自覚し発顕できるようになるのだ。

『「成る」の体験、「知る」の体得、「行う」の体顕の三位一体の境地の発顕のみが学問的真実を語り得るものに外ならない。』と今泉先生が説明しているように、理論・推論の絶対性を疑い共助社会の中で「体験、体得、体顕」するところの学問を重視するべきである。

『我々は宇宙の中に生きておるし、我々もまた宇宙を構成する分子に外ならない。従って我々は宇宙と一体に「成る」ことができなければ宇宙を「知る」ことはできないのである。』『(宇宙の) 外から抽象して得た概念はいかに理論的に整備されたとしても、生きた宇宙はそこからは出てこないのである。』としているように、例えば、日本の武人に成って武道の稽古を体験すれば、次には日本の武を体得して「知る」こととなる。体得して知ったことは、実際に行うことで体顕できるわけだ。これこそが真の学びと成長であって、理論的に推論してみたところで日本の武の何たるかは「行う」ことはおろか「知る」ことでも

きるはずがない。

グローバル化によって解体された伝統的「家」を、新たな共助体の「家」として再構築しなくてはならない。そこでは、共助の精神である「世のため人のため力を尽くす」こと、「人様に迷惑をかけてはいけない」ことを基本的価値慣習とする。共助体の一員としての自覚が芽生えれば、自発的に一員と「成って」共助体の仕事に加わる。共助体の一員として一所懸命働けば、仕事を「知り」、所を得ることになる。共助体の中で己の所を得たなら、社会のために為すべき仕事を一生懸命全うする。それが、人々の役に立ち幸福と成長に貢献すれば、おのずと他の人々から感謝され、生涯を全うした後もその生き方は崇敬の念を持って語り継がれ引き継がれ、共助体の守り神となって永遠に祭られる。その人の精神は歴史伝統として、不朽の時と共に生き、何時の時代でも「今」その時々の人々共に生きつづける。このような共助体の形成を先ずは家庭で実践し、次に身近な町内会や自治会あるいは会社やNPO等からはじめ、夫々の共助体の特性を相互に尊重しつつネットワークを構成し、それが地方自治や国家運営に広がり、更には世界に広げる。人々が心をつにして『八紘為宇』を実践する共助体が新たな「家」となる。

ここに、真の平和があり、ここに真の幸福がある。人間が神と、時と、自然と一体と成って宇宙創元の活動に参画し、皆が天上無窮の成長発展のなかに生きる世界が実現される。

私達は、人間本来の使命を自覚し、体験・体得・体顕し、それを世界に示すこと。この世が高天原に成るように為し続けること。そのために、「宇宙の中に生まれ、宇宙の中に行い、宇宙の中に死ぬ」という気概をもち、全世界において、天、国、家、人が一体となって八紘為宇の実践者となって、より良い世界を創る為に「行う」自己を今此処に体現しなければならない。自らが天之御中主神の分霊であるの覚悟を持たなくてはならないのである。